明代嘉靖期の大同反亂とモンゴリア（下）

――農耕民と遊牧民との接點――

萩原淳平

四　二十四年の反亂未遂事件

この事件の發端は、二十四年の晩秋に大同附近の平虜・威遠・玉林・渾源・陽和・山陰の六ヶ所の草場に、二日間に火災が續けて起った事からはじまる。これらの地は、大同に近いとはいえ、さきの五堡のように大同に接近した所ではなく、かなり離れている。なかには渾源・山陰のように大同より南に位置する所もある程であるが、すべて大同をとりまく重要な防衛據點であった。そこに相繼いで火災が起ったが、その原因が判明せず、不審火として、疑いをもたれた。そこで中央政府は科臣の李文進を派遣して調査させることにした。ところが、その調査中に、たまたまモンゴリアに逃げ込んだ奸人の王義というものが、長城を越えて再び明側に入って來て、胡峪口まで來た所で、太原の邏卒に捕獲された。取り調べに對して王義が言うには、「虜酋の青台吉が、自分をして山陰に入って火を放たさせようとした」と。守臣がしらべたところ、その嚢中から火つけ道具が出てきたので、この事を上奏してきた。中央政府では、その處置として、王義を斬罪に處した。

そうこうするうちに、大同の宗室である和川王府に盜賊が入った事が發覺したが、これは襄垣王府中尉の充爀らと關係があるというので、役人が充爀の家奴を訊問したところ、その家奴は、その事については答えないで、ただ「充爀がかっ

て神機箭をもって、ひそかに門客の門四・李錦らに授けて、各草場におもむいて火を放たさせた」と告げた。そこで門四をとらえて訊問したところ、「宗室の充灼および充爝ら八人が共謀して、謀反をはかり小王子を勾連して大同に侵入し、根據地を確保しようと計った。そして、まづ門四らに命じて、積み重ねてある草束に火をつけさせた」と答えた。

火がすでにその草束の間に置かれた丁度その時に、たまたまさきの王義が山陰の草場に潛入して來た。そして、火が突然燃えひろがるのを見て、走り出て來た。

また、偶然にも丁度その時に、役人が見まわりに來ていて、王義をすばやく捕えた。そして、彼は火具を持っていたので、實際には、自分が火をつけたのではなく、火事の原因については知らなかったのであるが、言いのがれが出來なくなり、前述の虚僞の自白をさせられたと思われる。

たまたま、別の機會に、充爝らが小王子に入寇を約束させるために派遣した使者の衞奉らも總兵の周尙文に捕えられた（嘉靖二十四年十月壬辰）。

このように、ささいな事件ではあるが、三つの事件がほぼ時を同じくして重なった。しかも、これらは互に關聯があり、これを總合すると大謀反事件が浮び上ってきた。

そこで、嘉靖帝は、とりあえず門四ら、および諸宗室の謀逆者をとらえ、北京につれてきて嚴重に調べさせた。その結果謀反の全貌が明らかにされた。

すなわち、これより大分以前に、充灼や昌化王府の奉國將軍俊桐・俊樑・俊宰・俊椽、潞城王府の鎭國中尉俊振、襄垣王府の奉國中尉充爝・充熾らは、好んで兇徒をあつめ、酒を飲んでは惡事をはたらいていた。それに大同の人張文博・李欽・李舜臣・張淮・李紀ら數人がこれを助けていた。そうこうするうち、金に窮したのであろう、充灼らは大同の劉知府の財物を劫奪した。これが發覺し、その祿を奪われてしまった。そこで、彼らは怨をいだき謀反を計畫した。充灼は各宗室および文博らを呼んで酒を飲みながら、

我らは祿を奪われたのに代王は何ら面倒を見てくれない、このままでは困しみ死ぬより方法がない。ただ死を待つよりは、いっそ北虜をひき入れて大同城を包圍させ、自分らが內應して城門を開き、彼らをむかえ入れて、代王や鎭撫の大吏を殺して事をあげたならば、貧乏に苦しむことも無くなろう。

それには、まづ各草場を燒き拂って、兵馬をして屯牧出來ないようにしておくのが最善の方法である。

と、計畫を述べたところ、一味のものは、この說に從った。

なかで、張淮はひそかにその黨の妖人次仲太にこのことを告げた。次仲太が言うには、自分の師である羅廷璽がもし來てくれれば、すべては事がうまく運ぶだろうと。この羅廷璽という男は應州の生れで、その黨の王廷榮と共に白蓮敎を奉じて、民衆をまどわせていたが、張淮は次仲太を介して羅廷璽に會って見たところ、廷璽が承諾したので、改めて、彼を主謀者の充灼に會わせた。

廷璽は充灼に會うや、「あなたには天分がある」と言って充灼をおだてあげた。充灼はこれにすっかり喜んで、謀反の計畫を全部彼に話し、更に細かい計畫を作らせた。

それによると、「まづ小王子との連絡をはかり、小王子には道中掠奪をさせないで、三路から兵を進め、直接大同城にいたらしめ、小王子を之に居らせる。また別に兵を派遣して、鴈門關を攻めさせ、同時に王廷榮と約束して、これに內應させ、平陽をとり、充灼を立てて主とし、胡兵を以て四方を討伐させる。討伐が成功したら、計りごとをもって小王子を殺したならば、大事は成功するであろう」と。

充灼らは、この計畫によることにして、直ちに實行にうつしたが、成功しないうちに、前記の三事件が發覺してしまった。

ただ、そのなかで、後の調査によると、衞奉に關しては彼が虜語に通じているというので、小王子との連絡の使者にあてられた。しかも實際に威寧海子の北岸に到着し、小王子所部の察罕兒らに遇い、種々打ち合せをしたようで、例えば一

色の旗を持って行き、その半分は府に留め、他の半分は小王子に送って、目印とすることなどを約して、還って充灼に報告した。充灼は次に、張文博に小王子に與える表文を作らせ、再び衞奉にその表文と旗幟をもたせて使に出した。その旗には、「調兵」の字が書かれていたといわれる。たまたまこの時に、彼は總兵の周尙文が出邊哨探させていた巡邏の兵に見つかり、傘をもった擧動不審な四人というので、しらべられて發覺したのである（嘉靖二十五年十月癸巳）。

さて、この事件は不成功に終って、大事には至らず、嘉靖二十五年十月に奉國將軍充灼等主謀者を死刑に處して落着したが、その性格から言えば、かなり特異なものであった。

まづ、その主役を演じたのが、宗室であった。世宗の言をまつまでもなく、宗室とは國家の藩屏たるべきもので、世々國恩を受けながら、祖訓に遵わず、天道に違逆し、朝廷に背叛したのである。ただし宗室といっても、嘉靖時代ともなると、その濃淡によって、階級にも種々あった。この事件で活躍した人々は、奉國將軍、鎭國中尉、奉國中尉で比較的低い身分であった。『明史』諸王傳の序によれば、

親王嫡長子、年及十歲、則授金册・金寶、立爲王世子。長孫立爲世孫。冠服視一品。諸子年十歲、則授塗金銀册・銀寶、封爲郡王。嫡長子爲郡王世子。嫡長孫則授長孫、冠服視二品。諸子授鎭國將軍。孫輔國將軍。曾孫奉國將軍。四世孫鎭國中尉。五世孫輔國中尉。六世以下皆奉國中尉。其生也、請名。其長也、請婚祿之。終身喪葬予費、親親之誼篤矣。

とある。なかで最も高いのが主謀者の奉國將軍充灼であるが、これは代王第三代の隱王の庶四子が代王の一支流として和川王を立てたが、その曾孫にあたるから奉國將軍となっていた。昌化王は代王第二代から分れた王。潞城王、襄垣王は、初代代王から分れて分家したものである。同じ代王から分れたものだけでも、明末までに二十四家をかぞえる。從って、この程度の宗室はかなり多數にのぼったと推定される。極端な例をあげるならば、晉王の第三子慶成王は、男子一百人を生み、それが皆成長したため、襲爵した長子をのぞいて、九十九人が鎭國將軍に封ぜられたとある。この子供たちがそれ

ぞれ輔國將軍、その孫たちが奉國將軍……と増加すれば、全國ではかなりの數にのぼったと思われる。この當時の詳しい統計記錄はないが、この事件後、わずか十九年の隆慶三年五月辛酉の禮部郎中戚元佐の疏によると、

國初は親王、郡王、將軍はわずかに四十九であったのが、二百年後の今日、宗枝玉牒に現存するものだけでも二萬八千四百九十二にのぼっている。

とある。また、その費用については、嘉靖四十一年、御史林潤の言によれば、

天下財賦、歲供京師米四百萬石、而各藩祿歲至八百五十三萬石。

とある。これによっても明らかなように、この頃には、宗室といっても、その數は膨大なもので、從ってまた種々の問題も起るようになっていた。[10]

たとえば、寧王の朱宸濠は錢寧ら朝廷內部の奸臣と通じ、自分を彈劾した胡世寧らの官僚を失脚させ、一方、無賴の徒を集め、武器を製造して、終に正德十九年には反亂を起し、南昌を出て、南康・九江を攻略し、兵六萬を率いて南京に向い、一時は安慶を圍んだ。しかし、この反亂も王守仁によって鎭壓された。

また、安化王の朱寘鐇は、劉瑾を討って君側を清めるという名目で正德五年反亂を起した。

これらは、宗室のうちでも頂點に近く位するものであるが、これに對して、底邊におるものは、また別の原因で不滿を持っていた。さきの戚元佐の疏によると、

諸藩日盛、祿糧不繼。……人多祿寡、支用不敷、乃有共蓬而居、分餅而膳、年四十而未婚、廿載而不窆、強者劫奪於郊衢、弱者竄浸入於輿皂。

と云う狀態で、滿足な生活も送れず、なかには、食事も思うにまかせず、貧窮のあまり、四十歲になっても結婚出來ない狀態のものもあった。從って、宗室のなかから反亂主謀者が出るのも免れがたい狀態とも言える。

この嘉靖二十四年の反亂事件でも充灼は、

舉事、則不憂不富貴矣。

と言っている。從って、この反亂事件は、ただ宗室の反亂事件という點では特に著しいものではない。

しかし、ことさら本稿で取りあげたのは、先にも觸れたように、北方防衞の最も重要な據點で、しかも國初から北方防衞のために配置された宗室がその對象であるモンゴルの中心人物小王子と結びついて反亂事件を計畫したことにある。この事件とくにその計畫をたてさせた社會的背景を考えてみると、すでに多くの漢人がモンゴリアに逃亡し、一方では小王子と結び他方では國內の不滿分子との連絡をはかりつつ反明勢力を形成しつつあることが推測され、明朝の北邊では政治的・社會的にかなり重大な局面が訪れつつあることをうかがうことができる。延いては明朝北方防衞史上、また明代蒙古史上、さらには明蒙交涉史上において轉期が訪れつつあることを示唆したものといえる。事件そのものは未然に發覺し、ささいなものに終ったが、さきの十二・三年の事件とともに甚だ重要な意味を持っていた。

また、この事件に至ってはじめて羅廷璽とか王廷榮らの白蓮教徒が明確な姿で北邊問題に姿をあらわしてきた。この後、白蓮教徒は益々活躍するようになる。そのことは曾って私も觸れ[11]、またその後にも新な研究[12]が發表されたことによっても明らかである。この點からもこの未遂事件は重要な意味を持っている。

五　モンゴリア情勢と漢人

これまでは、大同の諸反亂を主として明朝側の立場からみてきた。その結果、反亂を經過するたびごとに、叛卒ははじめは恐れていた北虜に、明朝支配下で自ら窮地に陷った立場上次第に積極的に働きかけ、終には續々とモンゴリアに逃れたことを述べた。次には、これらの叛亂軍の逃亡を許したモンゴリア側の立場から彼らがどういう役割を果たし、どのような影響を北アジア遊牧社會に與えたかを考察して見よう。

順序として、當時のモンゴリアの政治情勢、特に支配層の狀況に簡單に觸れておこう。かの有名なダヤン・カーンが內

モンゴリアを統一して、その所領を諸子に分封して死んだのが正德十四年（一五一九）であった。[15] その後繼者には當時生存していたダヤン・カーンの諸子のうちの最年長者であるバルスボロト（Barus bolod・阿着）が就任したが、その選任の方法が誤っているとして、僅か一年あまりで、バルスボロトの兄ウルスボロト（Ulus bolod これよりさき既に戰死していた）の子ボディアラク（Bodi alay）が正德十六年（一五二一）に卽位した。ボディアラクは嘉靖二十六年（一五四七）ころ死亡したと思われるので、本稿で取りあげた三回の大同の反亂事件はすべて、ボディアラク・カーン統治時代といえる。ただしこの間、モンゴリアでボディアラクが絕對の權力者であったわけではない。先に退位させられたボディアラクの叔父バルスボロトの二子ジノン（Jinong）とアルタン（Altan）の兄弟が次第に力をつけてボディアラクに對抗し、更にそれを凌ぐ勢力を持ち始めた。そしてその封地は、ボディアラクが東方大同宣府邊外であり、ジノン・アルタン兄弟は西よりのオルドスおよびその北邊であった。

さて、具體的にモンゴル族と大同の叛卒たちが接觸をもったのは、第二回の嘉靖十二・三年の反亂の時である。先にも觸れたように、このときは、叛卒は北虜十餘騎を大同城內に引き入れ、代府を指して、

ここを以って、那顏の居所とします。

といった。明日北虜數萬騎が東南二門を攻めた。この那顏はモンゴル語の Noyan の音譯であろう。人名ではなく、皇子とか諸王、領主或は單なる敬稱の意味もある。ここだけでは漠然としていて誰を指すのか明らかでない。しかるに、明實錄の嘉靖二十三年七月辛酉によれば、

北虜小王子那燕的將糾虜入寇。

とあり、この那燕もさきの那顏と同じのものを指し、小王子と同格を示すと思われるので那顏は小王子であり、ボディアラクに相當する。この第二回の反亂事件のときのボディアラクは、恐らく第一回反亂事件の叛卒の一部の逃亡した者との接觸によって、對應的に出軍したものであろうが、接觸があまり深くなかった爲でもあろう、意外に反亂軍に對して冷淡

であった。叛卒たのむに足りず、しかも約束の金帛が手に入らないと見ると、叛卒を恥づかしめて引きあげてしまった。

第三回の嘉靖二十四・五年の事件は、小王子とあり、これまたボディアラクが對應している。ただこの事件は未遂に終り、しかもそれ故に表面にでてくるのは大同の宗室で、その陰謀が強調されているが、計畫そのものを見ると、第二回の時よりは、一層綿密である。これには白蓮教徒が介在しているが、その中間的な接觸ないし交渉には、逃亡叛卒の力があづかったからこそ、計畫が密に行なわれたものと思われる。概して言えば、逃亡叛卒のボディアラク統治下の役割は、長城以南の明朝治下の地方への侵入掠奪の謀議に參畫し、その嚮導或は先鋒、または間諜として、その重要さを增して行ったと思われる。

これらの傾向は、ボディアラクの對明政策にも明らかにあらわれている。ボディアラクがカーン（小王子）位に就いてからは明朝に對しては常に武力侵入を行ない、平和的な朝貢馬市政策は取らなかった。唯一の例外と見える嘉靖十一年三月癸亥の記事に

先是、虜自延綏求通貢市。事下。兵部言、小王子進貢、雖有成化弘治年間事例、但其情多詐、難以輕信。宜命總制鎭巡官、察其眞僞。無何、虜以不得請爲憾、遂擁衆十餘萬入寇。

とある。この記錄は一見すると、小王子ボディアラクの朝貢馬市要求のように見える。『明史』の「韃靼傳」では、

十一年春、小王子乞通貢、未得命。怒遂擁十萬騎入寇。

と、小王子論を取っている。しかし、『明實錄』の記事の後半を良く讀むと必しも小王子とはいえない。すなわち、この北虜が小王子ならば、成化・弘治の事例もあることであるから許可してもよいが、その情は詐りが多く、輕しくは信じがたい、言いかえれば、小王子の樣に見せかけているが、實は小王子または小王子直屬下の者とは異るようである。よく眞僞のほどを確めなさいという意味である。特に小王子ならば大同から來るべき所を、延綏から來ている。延綏に最も近い北虜といえば吉囊またはアルタンである。『國榷』の十一年三月癸亥のところには、

初吉囊款延綏塞、求互市。

とあり、私としてはこの北虜は吉囊の方が正しいと思う。従って、ボディアラクは明朝に對して一貫して侵入掠奪だけを行ない、平和交渉は持たなかった。これはボディアラクの性格とか感情的なものに基くのか、或は確たる政治方針に基くものか、または、逃亡漢人が、假りにボディアラクと明朝が平和交渉を持つと、當然明朝の逃亡漢人追求の手が延びてくることを恐れて、ことさらボディアラクと明朝との間をさく政策をボディアラクにたきつけ、それが成功したものかは明らかでない。恐らく、それらが重なって、ボディアラクの對明武力政策が一貫して行なわれるようになったものであろう。このような支配者の下にあっては、逃亡漢人も明朝からの追求を免れて、ある程度安んじて活躍することができたであろう。

これに對して、ジノン・アルタン一派の對明政策はかなり異なっている。ジノンは前述の通り嘉靖十一年に朝貢使節を派遣している。アルタンも二十年七月に石天爵・肯切の二人を使者として大同に朝貢使節を派遣し、續いて二十一年閏五月に朝貢を求めてきた。更に二十六年四月己酉にアルタン・ジノンらの朝貢要求の使節に對する明朝の對策を述べた文中に、總督翁萬達および巡撫詹榮、總兵周尚文らの言葉として、

虜自冬春來、遊騎信使款塞求貢不下數十餘次、詞頗恭順。

とあるように數十回も使者を派遣している。アルタンはその後も何回も使者を派遣し、隆慶四年（一五七〇）終に目的を達した。

それならば、アルタン一派は明朝に對して常に和平政策を徹底的におしすすめたかといえば、必ずしもそうではない。むしろ逆の現象、すなわち侵入掠奪の方が強くあらわれ、その規模においては、遙かにボディアラクを凌ぐものがあった。その例をあげれば、ただ北虜とだけあって明らかでないものを除いて、確實に吉囊・俺答の名をあげた侵寇だけを取っても、嘉靖十三年二月の延綏入犯をはじめ、同年八月の吉囊十萬騎が花馬池入犯、十五年正月の吉囊十萬楡林侵寇、同

八月涼州、十六年八月甲寅、十七年八月河西侵入。十九年には八月二十一日に延綏侵入、內地深く入って縱橫鹵掠し、九月十二日に境外に引きあげた。二十年には吉囊が寧夏・甘肅・莊浪に侵入、八月に俺答・吉囊七・八萬をひきい山西に深入すること數百里、岢嵐・石州・壽陽・楡次・陽曲・太原等の州縣で、宗室のとらえられた者四人をはじめ、軍民の殺されたり捕えられた者五萬一千七百餘人。焚掠された所は數え切れなかったという。前後、明軍が斬獲しえた北虜は僅かに三百九十三級であった。こうして、吉囊・俺答の首を斬る者には爵都督を與え、賞金千兩を加えるようにという上奏もあらわれた。

翌二十一年六月十八日には、俺答が數萬騎を率いて山西に侵入、七月二十二日にひきあげるまでに殘破する所の衞所十、州縣三十八、殺掠された男婦十餘萬人、掠奪された馬牛畜產財物器機は計算できない程にのぼった。一說には殺掠二十餘萬、牛馬雜畜二百餘萬、燒かれた家屋八萬戶、荒された田畑は數十萬傾と云われる。その後も、侵入掠奪事件は續けられた。

このように見て來ると、ジノン・アルタン一派の行動は、搶掠と貢市、戰爭と平和の相矛盾する行爲を重ねていることになり、明朝として彼らの眞意がどこにあるか疑わざるをえないであろう。しかし詳しく調べて見ると、初期の甘肅・莊浪方面の侵入事件は、彼らの西方經營の一端を示したもので、明朝の被害は少ない。山西地方への大規模な侵入は、朝貢を要求して、許されない直後に行なわれるので、彼らの明朝への報復と次の朝貢要求に對する武力的壓力を意味する。

搶掠雖獲有人畜而紗段絕少、且亦自有損失、計不如貢市完。

すなわち、武力侵入は損害もあり、獲るものは人畜であっても中國產の高級織物類はえられない。朝貢と搶掠は對象が異なる。アルタン一派にとっては實は朝貢による返禮品が必要であるという基本方針があった。朝貢貿易品は自らの使用に供する以外に、西方貿易の商品として價値が高い。アルタン一派は明朝へ朝貢すると共に西方經營をはかった。

他方、ボディアラクは西方をアルタン一派におさえられているから、朝貢はそれ程價値がない。むしろ遼東への東方經

略に意をそそいだ。これらの基本的な差異は逃亡漢人に對しても自ら微妙に影響した。特にアルタン一派のように根底に和平交渉を希望する立場の下にあっては、漢人らはいずれ身の危險を感ずる場面が到來する。勿論、アルタン一派の大侵入に際しては、あれ程大きな成果をあげ、またあれ程損失を少くすませたのには、漢人を間諜として或は先鋒として充分に活躍させたからでもあろう。しかし一度和平交渉となれば、明朝の要求次第では漢人を犧牲にせざるを得ない。事實二十年・二十一年の朝貢要求の使者には、漢人石天爵をあてているが、石天爵は結局捕縛され殺された。また人質として止めおかれたモンゴル人肯切に對して、アルタンは曾って捕えた漢人李山を送り交換を求めた。また後のことで事情も大部異なるが嘉靖三十年三月アルタンが宣府に朝貢を要求しに來たとき、明朝が叛卒を捕縛したい事を知っていて、叛卒朱錦・李實を捕縛して送り、誠意を示した。その後もこのような例はある。

ともあれ嘉靖二十五・六年ころのアルタンは、もし明朝が朝貢を許可すれば、

邊內種田、邊外牧馬、夷漢不相害。東起遼東、西至甘涼、俱不入犯。今與中國約、若達子入邊墻作賊、中國執以付彼、彼盡奪其人蓄馬、以償中國。不服則殺之。若漢人出草地作賊、彼執以付中國治罪。不服亦殺之。

とあるように（嘉靖二十五年五月戊辰・二十六年四月己酉）、長城を境に、モンゴリアはモンゴル族の遊牧社會、明側は漢人の定着農耕社會として截然と區別して、互に干渉しないという考えを持っていた。

これに對して、ボディアラクはそれ程明確な意識は持っていなかったと思われる。當然のことながら、この兩者はその支配下に入った漢人に對しても、その漢人觀を異にし、漢人の取り扱い方も異っていた。

このような情勢にあるモンゴリアに一つの大きな轉機が訪れた。それは、嘉靖二十六年六月のことである。明實錄によると、

是時、俺答諸酋與小王子有郤。

とある。アルタンを盟主とする諸酋とボディアラクとの間に紛爭が生じたというのである。そして、その後この小王子一

族は本據地を離れて遼東地方に徙幕し、北方の事情は大きく變るのである。

この徙幕については、和田氏に詳しい研究がある。[14] それによれば、徙幕原因について、

この時小王子の將に驅逐せられんとするのを語れるものではないだろうか。況んや「是時、俺答諸酋與小王子有郤」という。彼等の東進は小王子に薄ったもので、その「小王子欲寇遼東」というのは、卽ち小王子の東遷を意味したものではなかったか。かの全邊略記にいへる「至嘉靖中、虜酋打來孫與俺答盜馬仇殺、遂挈所部東徙」なる語は、この實錄の「是時、俺答諸酋與小王子有郤、小王子欲寇遼東」という語と全く相適い、この時明は俺答を信ぜず、その夾攻を許さなかったが、小王子も實は遂に遼東を侵犯しなかったことは益々以ってこの推測を立證するであろう。果たして然らば、この年博迪汗死したるがために、新立の可汗達賚遜が驕横なる從父諸酋の壓迫陵侮に堪えかねて、忽ち東方に出奔したものと解される。事は正しく嘉靖二十六年七八月の交である。

と述べている。和田氏によると、嘉靖二十六年七・八月のころボディアラクが死に、その子のダライスンは盜馬の事でアルタン一派と爭いをおこし、その壓迫に耐えかねて遼東に逃げたというのである。盜馬の事は『全邊略記』では嘉靖三十七年四月の記事で、十年も後の事と結びつけることは如何にも不適當であろう。

ボディアラクとアルタン一派との爭いはそのような簡單なものではなかった。

これより四ヶ月前の嘉靖二十六年二月に李天爵を使者としてアルタンは明朝に朝貢を要求した。その時の李天爵の言によると、

俺答言、其先祖父俱進貢、今虜中大神言、羊年利于取和、俺答會集保只王子・吉囊台吉・把都台吉、四大頭目商議求貢。

とある。アルタンがモンゴルの三大頭目を招集して、明朝に朝貢を要求するための對策をはかった。その中には、

吉囊屢犯邊境且有並呑小王子之心。

と、以前から仲のよくない小王子の保只王子卽ちボディアラクが含まれていることは注目すべきことである。アルタンはこれまでに明朝に何回か使者を派遣して誠意を示したり、逆に武力的壓力を加えても朝貢に成功しなかった。朝貢を成功させるためには、どうしてもボディアラクの協力が必要であることをアルタンは感じていた。例えば、嘉靖二十年七月の朝貢使者を派遣した時でも石天爵に北方に歸って小王子の眞正番文をもとめてこさせようというのが明朝の基本的態度であった。また嘉靖二十五年七月にアルタンが朝貢を要求する使者を派遣した時にも、その有印番文一紙が問題になり、

兵部謂、譯出番書文義、既無酋長姓名、又無求貢年月、且其印文夷篆非中國舊所頒給、情狀難憑。

とある。その結果通事をつかわして詰問させ、改めて、眞正の番文をもたらすことを要求させた。

明朝では、モンゴリアの內部事情はどうであれ、明朝に對する朝貢權を持っているのは、代々最高の權威を持つ小王子に歸屬しているものと見なした。またそこには朝貢用の公式の書式や成祖が與えた印誥が傳わっているはずである。明朝の禮部では、そのような小王子ボディアラクが居りながら、彼は朝貢せず、その輩下と見なされるアルタンが勝手に朝貢を要求して來ても輕率には應じられないという考えがあった。從ってアルタンはこの何時も問題になる眞正の番文、卽ち朝貢文書を小王子ボディアラクに書くことを承認させる要求があった。また、眞正の番文だけでなく、明朝の不信感を除き、誠意を示すには、

東起遼東、西至甘涼、俱不入犯。

ということが必要であった。假りにアルタン一派だけが西方で入犯しなくても、ボディアラクらが東方で侵入したのでは明朝も朝貢に應じてくれないだろうという見透しである。これらのことが四大頭目の間で議題となったと思われる。

しかるに、ボディアラクは會談でこのようなアルタン一派の願望を無視し、意圖を妨げて、これまでの彼の基本方針をつらぬこうとした。その具體的なあらわれの一端が小王子ボディアラクの遼東侵寇のための東行となってあらわれたと解される。會談による說得工作に失敗したアルタンは窮したあげく、

俺酋以其謀來告、請得與中國夾攻之、且以此立信。

となり、逆に明朝の力をかりてボディアラクを討とうとしたもので、同時にこれによって明朝の信頼をかち得ようとしたものである。従って、「是時、俺答諸酋與小王子有郤」は、和田氏の言うように盗馬が原因ではなくて、これまで両者の間で潜在的のまま表面化しなかった基本的立場の相違が、アルタンの會談による説得工作の挫折失敗によって、顕在化し表面化したことを示すものである。

また、「小王子欲寇遼東」も和田氏の言うように、ボディアラクがアルタン一派の横暴に耐えかねて遼東に逃げたというような消極的・受動的な行動をさしたものではなく、逆にボディアラクの基本政策を示す自主的積極的な行動をあらわしたもので、間接的ながらカーンの權威を示しアルタン一派の野望をくじく烈しい一撃であったと解すべきであろう。

このようにして、ボディアラクはアルタンの意に反して東方に向ったが、間もなく嘉靖二十六年七月に死亡[15]した。その後を若い長子のダライスン（Daraisun）が嗣いだが、ダライスンにボディアラクほどの力がなく、これに乗じてアルタンは勢力を東方に擴大するようになり、モンゴル主流派小王子カーン一派は以後アルタンによって遼東に封じこめられることになる。

さて、このようなモンゴリアの政治的轉換は當然その統治下にある逃亡漢人のうえにも深い影響をおよぼした。特にボディアラク統治下の漢人はその去就に窮することになった。例えば、明實錄嘉靖二十七年正月甲辰に、

山西宣大守臣招徠虜中歸人一千二百四十餘名、所獲達馬稱是。兵部請錄總督都御史翁萬達等功。得旨、萬達賜勅奬勵、仍同總兵周尙文・趙卿各賜銀幣。都指揮李懋・趙臣・參將張潤等給賞有差。

とある。これまで北虜の中に逃げた漢人を招來しようと明朝はあらゆる手段を用いたが、效果がなく、時に一人とか二人とか逃げ歸った者はあったが、この時のように千二百四十餘人も歸ってきた事はなかった。これは北虜中に政治的な大きな變化があって居ることが困難になったためであろう。次に、これに對する論功行賞が一部の高級武官に對して行なわれ

たが、それも曾っての石天爵・王三らの時と異って非常に簡略である。これは歸ってきた者達が、北虜の情報とか達馬を手土産にすれば明朝から罰せられない程度の者たちだからであったろう。すなわち、北虜侵入の際に捕虜になった一般兵卒あるいは農民、または食に窮して逃れた農民の類である。明朝に對して、北方に行く以前に何ら罪を犯していない者が大部分であったと考えられる。

これに對して、大同の叛卒のように、內地に居る時に大きな罪を犯し、北方に逃れてからも嚮導となったりして北虜の侵入を促した重罪人は、もはや北虜の政治情勢の變化だけでは明側に歸れない。彼らはボディアラク死亡などによって、相對的に力を增したアルタン一派に好むと好まざるとに拘らず依存しなければ生きる道はない。

嘉靖三十年以後、彼ら逃亡反逆者がアルタン支配下で讖緯の學、神靈の術、醫術、大工の技術、攻城器具の作製、中國侵入の計畫參加・先導、文字による記錄法などあらゆる手段を盡して、アルタンに取り入り、終には豐州に都城を築き、漢人五萬人を擁する農耕社會を作りあげた。それがひいてはアルタンの牧農王國、明蒙平和交涉の成立にまで發展する原因になったことは、かつて「アルタン・カーンと板升」で詳しく論じておいた。

ここで再び反亂者たちのモンゴリアで果した役割を歷史的に考察してみよう。

古來、東アジアの遊牧民と農耕民との關係は長く嚴しいものがあった。東アジアの歷史は南北民族の抗爭史と云う說や、北方遊牧民の南下の歷史とも言われ、その侵入掠奪の烈しさや、征服王朝の出現などはその最も著しいものである。また逆に、窮極において農耕民の擴大の歷史と解される面もある。漢民族の北方遠征や農民の進出もないわけではない。しかし、概して言えば、その兩民族を分離しようとして構築された長城は、運河とともに漢民族のなしとげた二大土木事業であれば、北方民族の南下の嚴しさが顯著であったと言えよう。

このような狀況のもとに、たとえ水草甘美な可耕地があるにしても、五萬人もの漢人が長城を越えてモンゴル族の支配する牧地に農耕社會を作りあげたことは、長城をめぐる歷史のうえからも特異な現象と言わなければならない。

さて、この五萬人はその數からいえば、過半數は前述の反亂とは關係ない人々であろう。度々の中國侵入の際に、捕虜となった兵卒や掠奪された農民である。彼らが「板升」の農業勞働力となったことは疑いない。しかし、可耕地と農業勞働者があっても「板升」は成立しない。

本來、遊牧民族は遊牧生產だけでは自活は困難である。少くとも發展を試みる場合、その經濟的要求を滿たすために、中國に侵入し掠奪するか、朝貢馬市貿易を行なう。その農業生產物、ないしその加工品を必要とするからである。從って、自らの支配地に可耕地があれば農業社會の成立を認める條件はある。しかも兵卒を捕虜にしたり、農民を掠奪する機會は常にあった。それにも拘らず、古來これ程大規模な農業社會が成立したことはない。それというのも、兵卒や農民は假りに農耕を強制されても、彼らは常に中國に歸りたいという意識がある以上、農耕を繼續させるためには嚴重な監視監督が必要である。それがためには遊牧民自身が定着せざるをえない。これは遊牧民の本質である遊牧生活を放棄しなければならないことになり、遊牧地帶の內戰遠征や中國侵入も困難になって不可能な事と言わなければならない。先にも述べたように、嘉靖十三年當時までは、禮部左侍郎の樣な高官の常識では、北虜が漢人をえても僅かに少數の特殊な奴隸として使役するか、遠夷の馬などとの交易の商品とするだけで農耕勞働者として使役したわけではなく、必要以上に漢人を掠奪するようなことはなかったと言える。この點からもモンゴル人自身がその支配下の地に積極的に漢人の農耕社會を作ろうとしたものでないことは明らかである。農耕のための勞働力としての漢人は「板升」の基礎ができて後、需要に應じて掠奪してきたものであって、板升の建設に最も重要な條件ではなかった。

次に「板升」には白蓮教徒一萬人が含まれている。彼らは恐らく反亂に直接或はそれに近い關係を持った者であろう。その果した役割は決して小さいものではない。しかし、白蓮教は資料的に見ても第三回の未遂事件になって初めて出てくるのであって、假りに潛在的にはそれ以前から活躍していたとしても反亂者およびこれに關係ある人々が精神的不安感を增大させてきた間隙に乘じて、迷信邪教をもってつけ入ってきたので根本的なものではない。そのうえ、白蓮教徒は元來

元末の最盛期にも見られるように、社會的不安に乘じて混亂と破壞を助長することをはかるが、「板升」のような建設的な行動は取らないのが普通である。また白蓮教は急激な膨張を見るが、板升の場合それ程ではない。特に白蓮教徒はことさら長城を越えなければならない理由もない。中國內部で擴大をはからないでモンゴリアに向ったのは、北邊防衞體制が確かにそれ以前に比べて維持されなくなったとはいえ、まだ中央政府・防衞軍が治安維持にはかなり威力を持っていたことを示すものである。

このような點を考えあわせるならば、白蓮教は板升建設を助長したとはいえるが、中心的役割を果たしたとはいえない。

板升の中核をなしたのは、少數ではあったが、反亂軍中の指導階級であろう。なかには白蓮教に入った者、と言うよりは白蓮教を利用した者もあったであろうが、宮殿・家屋・倉庫・城壁を築き、中には王者に擬して數千・數萬の漢人を支配し、その政治力・軍事力・特殊技能をもってアルタンに取り入ったのは、これら反亂軍中の才能ある指導者であった。彼らはまた重罪を犯したがために、再び中國には歸ることが困難な立場にあったからこそ、アルタンが捕獲した兵卒、農民をもその監視監督を安んじて委ねられる人物でもあった。このように見てくると、板升の成立に最も重大な役割を果たしたのは、外ならぬ大同の反亂に參加した指導階級であったと言えよう。

むすび

東洋史上、古來「長城」をめぐって、重要な事件が屢々起った。それは北の遊牧民族と南の農耕民族という根本的な相違が事件の複雜さを增す原因になった。本稿で取りあげた大同はこのような兩民族・兩社會の接點にある。遊牧民族出身の元朝を倒して漢民族王朝を樹立して百五十年餘、北方防衞の軍事的最大據點であるこの大同に、反亂事件が起った。はじめは一見ささいな事件に思われた反亂事件も、場所が兩社會の接點にあるという特殊性もあって、第二回の反亂事件、

第三回の未遂事件へと發展し、その發展を通して北方遊牧民を最も恐れたはずの守備軍の一部が逆に遊牧民に接近し、終には、遊牧社會内に板升を中心とした漢人農耕社會の建設に基本的役割を果す結果になった。

本稿では、反亂事件についてやや詳しく述べたが、それは事件をできるだけ正確に理解するためであって、筆者の意圖したところは事件そのものよりも、反亂後モンゴリアに逃亡した漢人が、明朝政府の對應策やモンゴル族の内情の變化のもとに如何に行動したかを研究することにあった。そしてその結果、遊牧民族史上で特異な存在となった板升の成立の基礎的要因を追求しえたと思う。なお、逃亡漢人のその後の行動については、「アルタン・カーンと板升」で詳しく述べておいたが、その指導者達はアルタンと明朝との和平交渉が成立した際の一條件として、明朝に引き渡され處刑されたことを付け加えておく。

註

⑩ 明代の諸王についての問題を取り扱った論文として、布目潮渢「明朝の諸王政策とその影響」『史學雜誌』五五篇、三・四號を參照されたい。

⑪ 拙稿「アルタン・カーンと板升」『東洋史研究』十四卷三號。

⑫ 野口鐵郎「明代北邊の白蓮教とその活動」『清水博士追悼記念明代史論叢』昭和三十七年六月大安發行。

⑬ ダヤン・カーンについては論爭が行なわれたがその主な論文は、和田清「達延汗について」『東亜史研究』(蒙古篇)東洋文庫、昭和三十四年。
拙稿「ダヤン・カンの研究」『明代滿蒙史研究』京都大學文學部、昭和三十八年。
佐藤長「ダヤン・カーンにおける史實と傳承」『史林』四十八卷第四號。
岡田英弘「ダヤン・ハガンの年代」『東洋學報』第四十八卷第三・四號。
拙稿「ダヤン・カーンをめぐって」『史林』五十三卷六號。

⑭ 和田清「察哈爾部の東遷」『東亜史研究』(蒙古篇)。

⑮ ボディアラクの死亡については明實錄に記述が無く、『アルタン・トプチ』の羊の年、卽ち嘉靖二十六年七月十日死亡說が現在までに最も妥當なものと思われる。和田清「察哈爾部の東遷」を參照されたい。